

# 新学校創造論

## ～コロナ危機後に「選ばれる学校」の条件とは～

コアネット教育総合研究所 神戸研究室 室長 嘉村謙一郎

### はじめに ～失って実感した学校の豊かさ～

日本はようやく緊急事態宣言の解除が進み、感染対策を講じつつ経済再建に挑むステージに移行しつつある。一方で、世界を見渡せば危機対応のただ中にある国々もあり、コロナ危機は未だ世界の脅威となっている（2020年5月下旬）。

本稿を書き始めるにあたり、まず世界各地で命を守るため、力を振り絞って感染者の治療にあたっていた医療従事者の皆様に、心から敬意と感謝の気持ちをお伝えしたい。

このコロナ感染の影響は、まさに甚大である。既に米国を筆頭に、世界全体で500万人を超える感染者と30万人を超える死亡者が生じている（いまだ増加中）。さらに移動制限や外出制限、幅広い業種の休業要請・指示による経済への打撃が想像を超える範囲と期間に及ぶ。そして本稿の主題である学校教育を含む社会生活全体を委縮させ、この事態からの反転・復興が各国の課題となっている。危機の顛末を検証・総括するにはあと半年、1年の期間が必要と思われるが、このコロナ危機は人類に、特に各国首脳や企業経営者、学校経営者などのリーダーたちに、「二つの責任」の狭間で苦渋の決断・対処をせまった。

#### ＜二つの責任＞

- ・ 政府：救命と経済維持
- ・ 企業：従業員の安全と事業・雇用継続
- ・ 学校：児童・生徒等の安全と教育維持

学校においては、突然の休校措置により、これまで当然とってきた授業（対面）、行事、クラブ活動、給食など、“学校という

場所・時間”がもたらしていた豊かな活動すべてが消えた。当初は、早めの春休み、ぐらいいに安易にとらえていた方々も休校の長期化が明らかになるにつれ、慌ててICT機器によるオンラインでの学習支援、授業の模索がはじまる。幸いにして各学年で機器活用が日常化していた学校と未導入校で、対処のスピードに差が出たケースがあったこと。また、全家庭の環境が必ずしも揃わない中でも、腹をくくりオンライン授業の早期開始を決断できたかどうかでも学校間で差が生じたことを伺った。この危機対応力、反省点を含む経験から得た教訓を活かせるかどうか（＝経営陣の力量）は、今後の学校選択（評価）の一つの要素になると思う。

ここで、本稿の思考の出発点・流れを説明し、本編に入る。今回は未だ渦中にあるコロナ危機後の新しい学校像を主題とした。「選ばれる学校」を考えるために、まず世界（社会）の変化を展望する。続けて、その変化にともなう教育ニーズの変化を考え、それをふまえた教育体制のつくり方を提案する。最後に、読者へのメッセージとして「コロナ危機後に選ばれる学校の条件」を述べたい。

思考にあたり、京都大学の山田剛史先生のお話を伺い、いくつかの示唆をいただいた。注目した箇所は後述するが、冒頭でご紹介し、改めて謝意をお伝えしたい。

#### 【本稿の構成】

- 世界の変化 「自国第一主義」から「大家族主義」へ
- 教育ニーズの変化と新しい学校像
- 教育体制の再構築
- 「コロナ危機後に選ばれる学校の条件」

## ■ 世界の変化

### 「自国第一主義」から「大家族主義」へ

まず、以下に2020年3月15日付の米国TIME誌に寄稿された歴史学者・哲学者ユヴァル・ノア・ハラリ氏<sup>(注)</sup>の記事から、着目したい記述を抜き出す。

記事名:「人類はコロナウィルスといかに闘うべきか  
—今こそグローバルな信頼と団結を—」

- ・感染症を封じ込めるのに短期の隔離は不可欠だとはいえ、長期の孤立主義政策は経済の崩壊につながるだけで、真の感染症対策にはならない ～ 本当の対抗手段は分離ではなく協力なのだ
- ・真の安全確保は、信頼のおける科学技術の共有と、グローバルな団結によって達成されることを、歴史は語っている
- ・感染症について人々が認識すべき最も重要な点は、どこであれ一国における感染症の拡大が、全人類を危険にさらすということ
- ・世界には、基本的な医療サービスさえ受けられない人が何億人もいる。このため、私たち全員が危うい状況にある
- ・今日、人類が深刻な危機に直面しているのは、新型コロナウィルスのせいばかりではなく、人間同士の信頼の欠如のせいでもある。感染症を打ち負かすためには、人々は科学を信頼し、国民は公的機関を信頼し、各国は互いを信頼する必要がある
- ・信頼とグローバルな団結抜きでは、新型コロナウィルスの大流行は止められないし、将来、この大流行に繰り返し見舞われる可能性が高い。だが、あらゆる危機は好機でもある。目下の大流行がグローバルな不和によってもたらされた深刻な危機に人類が気づく助けとなることを願う

(注)「サピエンス全史」、「ホモ・デウス」、「21 Lessons」など  
世界的ベストセラーで知られる歴史学者・哲学者  
出典:「出版社 河出書房新社のオウンドメディア Web河出」

上記の言葉から、皆様は何を感じられただろうか。

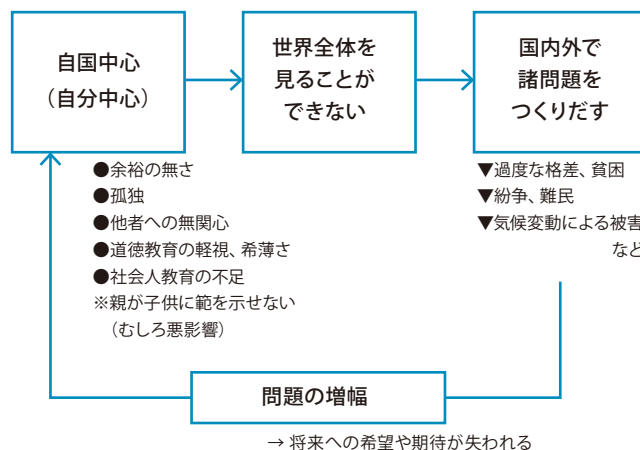
最後の「あらゆる危機は好機…」には賛同したい。ハラリ氏が全人類に提起したかったのは、コロナウィルスの脅威そのもの以上に、大流行をもたらした要因が「グローバルな不和」にある、との指摘(考察)。世界が被った災難は取り返せないが、これがグローバルな信頼と団結をもたらす結果になれば、未来の世代にとっては、もっと良い世界に近づく転機を得られたことになる。

感染症そのものは、時間がかかっても対策が進み、ワクチンが開発されれば収束する。ここから、より本質的な思考のために、危機克服を妨げる「グローバルな不和」をもたらす自国中心の考え方、「自国第一主義」の弊害に目を向けたい。

この「自国第一主義」を超え、人類全体にとってより良い世界

をつくるために設立された代表的機関が国連。しかし、現実には残念ながら理想にはほど遠く、「国連代表＝国家代表」のまま、国益を超えた決定・行動に踏み出すことがない。その象徴が、常任理事国間の対立で機能不全に陥ったままの安全保障理事会。結果として、解決困難な問題は増幅され続ける。(下図)

■ “問題増幅のサイクル” の図



代表例が、気候変動など地球環境悪化の問題である。人類ばかりでなく、地球上のすべての動植物の生存可能性すら脅かす状況に各国の科学者や有識者、心ある若者たちから警鐘が鳴らされ続けている。

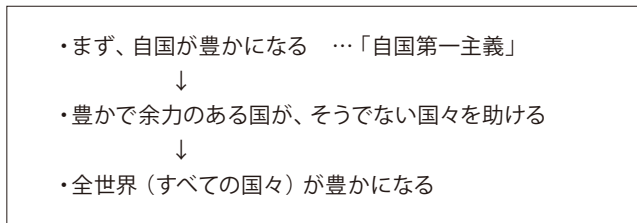
突破口として期待されるのが、SDGs17の目標(持続可能な開発目標)。貧困、飢餓、教育等の問題をはじめ、一国の努力では実現不可能な水、民族間・宗教間の紛争、気候変動などの難題克服のために、政府、自治体、企業、教育界などのあらゆる業種・世代を巻き込んだ変革への挑戦がはじまっている。

この業種・世代を超えた活動を加速し、国家の壁を越え、人種、文化、宗教の違いを超えた世界横断的活動とするために必要な考え方、スタンスとはいかなるものか。本稿では「大家族主義」の理念と表現する。この「大家族主義」の理念に立った国家間には、「他人」同士ではなく「家族」になる。家族がお腹をすかせ、病気で苦しんでいるのに、自分が満腹で健康ならいい、と放置する者などいない。ここから、思考を深掘りする。

そもそも、なぜ「自国第一主義」の克服が難しいのか。

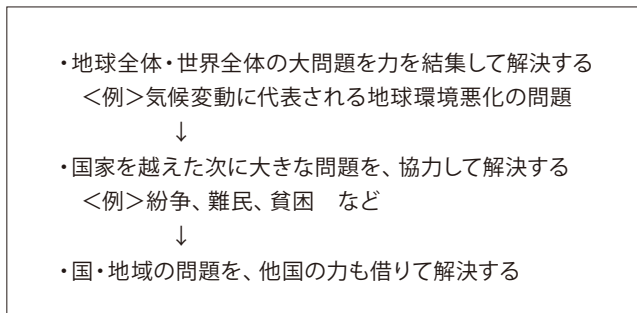
「自国第一主義」を国民個々のレベルで表現すれば、「自分中心」の姿勢、利己的な生き方になる。生まれた瞬間から利己的な人はいない、と考えれば、利己的な生き方は、後天的に身につけたことになる。実際、周囲を見渡せば、利他的な生き方を貫く各宗教の信仰者ではなくとも、寛容で他者への思いやりに溢れる人たちが、我が身第一の自己中心的な振る舞いが目につく人たちがいる。ゼロか100か、ではないので、大半の人は、利他的な性質が強いのか、利己的な性質が強いのか、の程度の差ではないか。

しかし、ここで確認しておかねばならないのは、国連の機能不全が象徴するように、“これまでのやり方では、自国第一主義を克服できない”という事実である。つまり、下記のアプローチは機能しない。



では、どうすればいいか。

「大家族主義」の理念に立ち、以下のアプローチに変えてみる。



そのためには、何かを変え、「利己的な生き方」ではなく、「利他的な生き方」の人たちが多数派にならないといけない。生き方を決める、あるいは、生き方を変える。そんなことが可能な力とは何か。まさに教育以外にはないだろう。

教育が人を創り、人が未来を創る。すべての国々が「大家族主義」の理念を共有するための出発点、原動力は「利他的な生き方」ができる人たちであり、それを実現するのは教育の力。

この認識を立脚点として思考を進めたい。



対する「利己的な生き方」を後天的に形成する要因を想像すると、例えば以下だろうか。

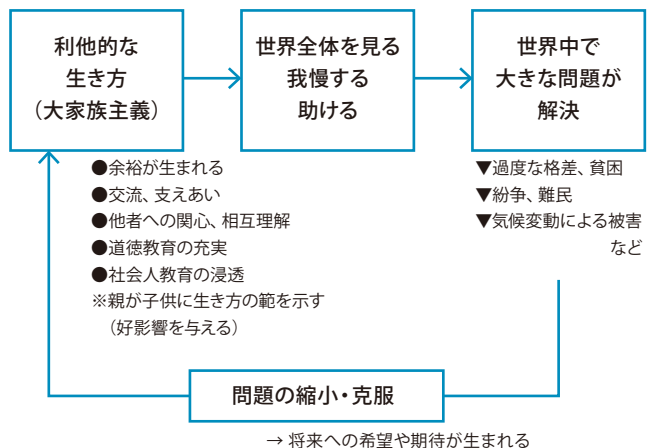
- ・余裕の無さ（個）
- ・孤独（個）
- ・他者への無関心（個）
- ・道德教育の軽視、希薄さ（家庭・社会）
- ・社会人教育の不足（地域・社会）

自戒を込めて言えば、最後に書いた「社会人教育の不足」こそが最大の問題ではないかと考えている。親が子供に望ましい生き方の範を示せていないとすれば、子供に望ましい生き方を期待し、求めることができるだろうか。

アプローチを変えて実現したいのは、問題を縮小・克服する好循環サイクルである。（下図）世界中で大きな問題が解決すれば、より小さな問題を解決するのは容易になり、その余裕も生みやすくなる。繰り返すが、実現するのは「教育の力」である。

では、「利他の心を持ち、世界を見て、世界の問題を自分の問題と考え、その解決に貢献しようと志す人物」を育む教育とは、いかなるものだろうか。次項で考えたい。

■“問題縮小・克服のサイクル”の図



#### ＜本項の整理＞

- ・望ましい世界の変化  
「自国第一主義」から「大家族主義」の理念へ
- ・望ましい個人の変化  
「利己的な生き方」から「利他的な生き方」へ  
まず、世界全体を見る→家族を助けるため、力を貸す
- ・すべての国々が「大家族主義」の理念に立つために  
実現するのは「教育の力」



## ■ 教育ニーズの変化 と 新しい学校像

### 1. 教育ニーズの変化

コロナ危機を経て教育ニーズはどう変化するだろうか。

危機を乗り越えるために、国民全体に忍耐力（自制心）、連帯が求められた。自身や家族の安全に懸念を感じつつも使命を果たすために勇気を奮って献身する医療従事者の方々。休む間もなく、経験則が通用しない緊急事態への対策に追われる政府や自治体のリーダーたちと、それを支える感染症専門家チームの方々。また、スーパーやコンビニの従業員、鉄道・バスなどの交通機関や自治体等の窓口業務に黙々と従事する方々の姿を日々目にして、これまでの職業観や描いていた将来像が変化した子供たちも少なくなかったのではないかな。

上記の渦中で奮闘し続ける方々以外はステイ・ホームを要請され、テレビ、WEB等では連日世界中のコロナ報道が続く。誰に求められずとも、世界・日本社会の現実と今後の見通しを考えさせられる毎日が続いた。これまでの日常が続いていたならば、おそらく振り返りもしなかった暮らしぶりを再考する機会が、意図せず得られたことになる。大切なのはここ。子供たちだけでなく、社会人一人ひとりにとっても、生涯記憶に残る日々。世界観、社会観、人生観が揺さぶられた。これを転機として、我々はこれまでになかった何に踏み出すことができるだろうか。

学校教育を通じて知識・技能とともに思考力、判断力、表現力、主体性、協働性などの力・資質を伸ばすことの重要性は、再認識されることはあっても、変わることはないだろう。

加えて、現時点では私見でしかないが、特に以下の3つの資質に注目したい。

- ・自律性
- ・創造性
- ・公共心

一つ目の「自律性」については、補足する必要もないと思う。突然、長期休校がはじまり、すべての生徒に自学が求められることになった。しばらく時間がたってから、この長期休校中の学習状況を振り返り、個々の生徒の伸びの差異を検証していただきたいと思うが、「自律性」の有無（高低）が大きく影響したであろうことは容易に想像できる。以前から、手取り足取りの「過保護教育」の害を指摘する意見に賛同してきたが、今回のコロナ休校で、それが誰の目にもはっきりしたのではないかな。もちろん、過保護の主因は「学校ではなく家庭（親）だ」との主張は理解できる。そのうえで、親や協力者も巻き込んだ自学支援型教育への明確な方針転換が必要な点を強調しておきたい。

二つ目の「創造性」だが、この資質は、“世界の問題を自分の問題と考える”人物の養成には不可欠と考えている。近年、世界のグローバル化が加速する中で、「グローバル教育」実践を言わない学校は、公立・私立を問わず、ほぼ皆無といえる。

一方で、「グローバル教育＝英語教育ではない」との共通認識に立ったうえで、

- ・なぜ、世界を知る必要があるのか
- ・世界全体にとって、望ましい未来とは
- ・世界の現実とは、なぜ望ましい未来と乖離しているのか
- ・その問題は、なぜ問題なのか
- ・その問題を解決するために、何ができるだろうか
- ・あなたに、何かできることはないか…

といった問いが教師と生徒、生徒間で交わされ、熟考・対話されているか、自問していただきたい。

これらの問いのすべてに創造性の発揮が求められるだろう。その先に、世界と日本、各国の人たちと日本人、世界の文化と日本文化の違いや共通性、多様性への理解・関心・好奇心などが芽生えてくるのではないだろうか。創造性を育む機会がグローバル教育以外にもいろいろあると思うが、驚き、刺激、体感こそ、その発火点になるだろう。再開後は、学校ならではの豊かさを活かした数々の体験機会を仕掛けていただきたい。

三つ目の「公共心」だが、平たく言えば、「世のため、人のため」に尽くそうとする社会貢献の意識、使命感のこと。利他的な生き方をする人が多数派となるために、不可欠な資質である。筆者自身は九州の田舎で生まれ、幼少期にはお盆や正月に祖父母の家に帰省して親戚の子供たちと過ごすのが楽しみだった。言って聞かせられた覚えはないが、この祖父母から、またこの祖父母たちが育てた両親からも、社会の一人として生まれたからには、「世のため、人のため」に役に立つ人になれと育てられたように思う。どれだけ社会のお役に立てているか、心苦しいが、根っこには今もこの姿勢、生き方を貫きたい思いがある。私自身が受けた田舎の公立の道徳教育はほとんど記憶にないが、現職についてから伺ったいくつかの私立学校、特に仏教、キリスト教などを根幹にもつ学校で、人間教育の大切さを痛感するお話を伺ったことがある。公立校にはできない骨太な人間教育を実践できる私立各校には、通過儀礼ではなく、この公共心を生徒全員の心に宿し、社会に送り出していきたいと願う。

## 2. 新しい学校像

まず、以下に京都大学 山田剛史先生のお話（2020年5月12日にオンラインで筆者と対話）から着目したい箇所を抜き出す。



**山田 剛史 先生** 京都大学准教授、博士(学術)  
高等教育研究開発推進センター  
(兼任)大学院教育学研究科

「大学生の学びと成長を促す教育・学習環境のデザインと評価」をメインテーマとし、教育の質保証やアセスメント、カリキュラムや授業のデザイン、FDやアクティブラーニングを含む教授法等に関する研究・開発・養成を行っている。近年では、高大接続への関心の高まりから、中学・高校におけるアクティブラーニングの導入に向けた指導法等に関する講演・研修、指導・助言を行っている。

### 話題：これからの学校教育について

#### ◆今、大学の状況はどうですか。オンライン授業は？

- ・本学を含め、かなり多くの大学が、オンライン授業をはじめています。1～2カ月の間で急速に適応しつつあります。  
大きくは二種類。動画教材を作ってアップロードするオンデマンド型と、オンライン会議ツールなどを使用する同期型のオンライン型授業ですね。
- ・もちろん問題もあります。小学校や中高よりは小さいでしょうが、通信環境、家庭環境の違いがあります。
- ・また、同期型にせよ非同期型にせよオンライン授業の限界があります。操作性、学生側の集中力など、どうしても、対面と比べれば教育効果は下がります。研修を行っても、不慣れな先生方はおり、どうしても差が出てしまいます。
- ・一方で、「苦手だと思っていたけど、案外使えるな…」と感じた先生方も確実にいます。そういう意味では、ICT教育に対するリテラシーレベルを、全国的に底上げする効果があったのではないのでしょうか。これは中高を含めて同様の効果が生じていると思います。

#### ◆これからの教育の展望について、どうお考えですか？

- ・最大の注目点、あるいは問題点は教育格差の問題です。  
お話したように通信環境、家庭環境の違いは当然あります。  
ただ、オンデマンド型の授業は、オンラインとは違い、時間的、地理的な制約を越えて視聴でき、一定の教育効果を担保できる面があります。例えば本学も取り組んできたMOOCのようなオンデマンド型講義が該当します。これは、学びの個別化への貢献という点で期待されるプラットフォームです。
- ・これまでの対面型の一斉授業の場合、どうしても内容は一律になりがちです。実際には、教室には様々なポテンシャルの子供たち、理解度の異なる子供たちが混在しています。一斉授業でそれをコントロールすることは難しいと言わざるを得ません。  
けれど、オンデマンドであれば自分のペースで学べます。
- ・また、オンデマンドの価値が再認識され、質の高いオンデマン

ド授業動画が確保できた場合、「改めて、学校はどんな価値を子供たちに提供するのか」が問われることになるでしょう。ここへの危機感、緊張感が生まれているように感じます。

- ・もう一つは、Zoomなどオンライン授業の可能性ですね。

各社が今後、優れた機能の開発を競うのでしょうか、例えばZoomのbreakout roomというバーチャル上に小部屋を作る機能があります。受講生たちをランダムに小グループに分けてディスカッションしてもらうことが可能です。物理的な制約がないので、毎回違う人たちと組み合わせて話すことが可能になります。新入生へのオリエンテーションやアイスブレイクのような使い方で、対面での話が苦手な学生がかえって話しやすくなる。

- ・結局は道具ですから、せっかく皆が獲得した道具を、うまく教育に取り入れていこう、という発想で、対面に、オンデマンドやオンラインを組み合わせる授業を創っていく方向に進むのではないのでしょうか。これは、大学も中高も共通だと思います。

#### ◆共感できる部分が多いです。一方で、それを実践する教師や学校側に新たな格差が生まれるのでは、とも感じました。コロナ後の教育で新たに生じる格差への対処も必要ですね

- ・技術的なことと言うと、年配の先生方と若手の先生方のリテラシーにはどうしても差が出てきます。これからの学びにおいては、一定の基礎技能は必要になるでしょう。
- ・また、先にふれた通信環境や家庭環境の違いは、公立ほどではなくても、私立学校でも存在するでしょう。オンライン授業に踏み切った場合、数%の生徒が受講できない可能性があります。しかし、その数%を待って、すべての生徒の学びを遅らせるわけにはいかないという面もあります。数%への対策は講じつつも前に進む。その決断を管理職ができるかどうか。ここも問われることになるでしょう。

#### <山田剛史先生のお話から 着眼点整理>

- ・コロナ危機は、ICT教育に対するリテラシーレベルを、全国的に底上げする効果があったのではないか
- ・オンライン授業は、オンデマンド型とオンライン型がある。オンデマンド型の授業は、オンラインとは違い、時間的、地理的な制約を越えて、一定の教育効果を担保できる
- ・質の高いオンデマンド授業動画が確保できた場合、「学校はどんな価値を子供たちに提供するのか」が問われる
- ・対面に、オンデマンドやオンラインを組み合わせる授業を創っていく方向に進む
- ・教育格差は私立学校でも存在する。数%を待って、すべての生徒の学びを遅らせるわけにはいかない。数%への対策は講じつつも前に進む。その決断が管理職には求められる

皆様は、どのような感想を持たれたでしょうか。

今回は短時間の対話であったこともあり、対話時点（2020年5月12日）最大関心事であったオンライン授業と、今後の授業の展望を中心に話を伺った。授業に関する考察や示唆は、概ねご理解いただける内容であったのではないかな。

続けて、この授業の展望を視野に入れたうえで、本項のテーマ「新しい学校像」について考えたい。

まず、山田剛史先生にいただいた示唆を含め、以下の3つの問いを設定した。この先を読み進む前に、お考えいただきたい。

- 問1. 学校の果たしてきた役割、提供価値は変化するか？

問2. 教師が果たしてきた役割、提供価値は変化するか？

問3. 生徒の学び方は変化するか？

実は、問1、問2についての所見は、これまで本誌で担当してきた記事のいくつかで述べてきたものと大きく異なる点はない。

既に変化は進みつつあり、今回のコロナ危機がその必要性をはっきりさせ、加速させる効果につながるのではないかと考えている。この後、少し補足する。その後、問3についての所見を述べたい。

問1. 学校の果たしてきた役割、提供価値は変化するか？

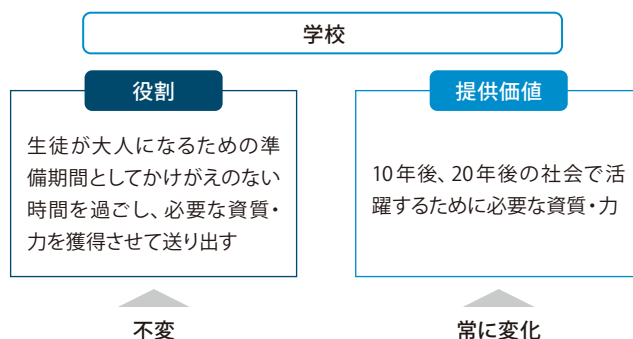
→所見：役割は不変。提供価値は常に変化し続ける

ニュース映像などで、度々、学校に行けない子供たちの姿を見た。また、休校中の学校に何うと、一人も生徒がいらないさびしいグラウンドを眺める部活顧問らしき先生、いつもは業務に追われて息をつく暇もないように見える管理職の先生の手持ち無沙汰な様子を、時おり拝見した。まさに異常事態であり、そこは残念ながら「学校」ではなかった。

学校はもちろん生徒のためにある。そして、その生徒が大人になる（社会に出る）ための準備期間としてかけがえのない時間を過ごし、必要な資質・力を獲得させて送り出すという役割は不変であろう。人は、一人では大人になれない。だから、学校にはかけがえのない存在価値がある。一方で、すべての学校が、すべての生徒に対して期待された教育責任を果たして（＝つけると宣言した力を修得させて）卒業させてきたかといえば、答えはNOだろう。現在の学校は「修得主義」ではなく「履修主義」であり、実際に資質・力を身につけたかどうかを確認・保証する機能を持たないためである。教育が生徒と教師の相互作用であり、修得するのが生徒自身である以上、従来の「教え込み」教育のままでは、学校がこの教育責任を果たせる日は来ないのではないかな。コロナ休校が、「教師が教える教育」主体から「自学探究を支える教

育」主体への転換の契機となればと思う。

#### ■ “学校の役割と提供価値” の図



問2. 教師が果たしてきた役割、提供価値は変化するか？

→役割は既に変化の途上にある。提供価値は不変

問1と重なる点もあるが、教師視点に立ってお伝えしたい。教育といえば「どう教えるか」を考える、という時代が長かったのではないかと想像する。理由は、これまでお話しした大半の先生方の見方、考え方が、“教える人（教師）から、教えられる人（生徒）”に向かうものばかりだからである。この学びのアプローチは、根本的に変える時を迎えているのではないかな。

例えば、私立の進学校でも導入が増えていると聞く予備校講師による放課後の受験講座。受験準備に特化したインプット中心の授業はまさにオンデマンド型にフィットする。もちろん、予備校講師と遜色ない受験対策授業を誇る先生方もおられるだろう。そういう先生方にはインプット編を担当していただくことにして、それ以外の多くの先生方には、アウトプット編を担当していただきたい。豊かなアウトプットには知識・技能のインプットが不可欠という点に異論はないが、肝心なことはその知識を活かした思考・対話・発想・創造や課題に向き合う姿勢・行動力を養う点にある。インプット自体も、教科書の暗記より好奇心に駆られた知識修得・探究の方が間違いなく身になる。

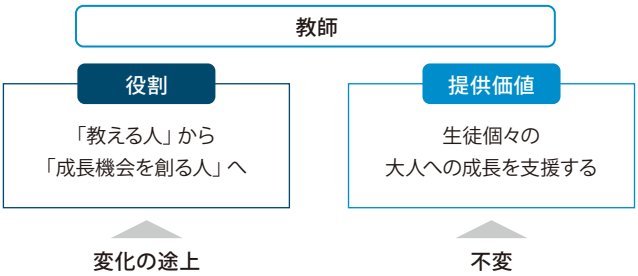
このようなアウトプット体験に導く過程や方法のすべてを教師だけで担う必要はない。職員との教職協働や卒業生、保護者はもちろん、大学や企業、研究機関など国内外との外部連携を自在にデザインしてほしい。これが、デザイナーあるいはプロデューサーとしての「新しい教師の役割」である。

今回、ICT教育に対するリテラシーレベルが上がったのは教師だけではない。在宅勤務を経験した一般の社会人も同様であり、この影響は日本だけにとどまらない。これまでは、グローバル教育といえば留学、のイメージがあったが、1～2年は控える傾向が続くだろう。しかし、海外校とのオンライン交流には何の障害もなく、そのうえ費用もあまりかからない。経済的に余裕がない

家庭の生徒を含めて、全生徒が体験できることも魅力だ。

このように、役割が「教える人」から「成長機会を創る人」に変わっても、生徒個々の大人への成長を支援する、という教師の提供価値は不変であろう。

■ “教師の役割と提供価値” の図



問3. 生徒の学び方は変化するか？

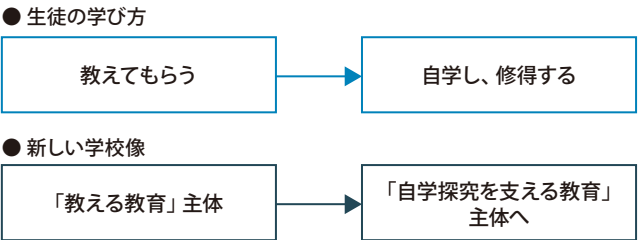
→「教えてもらう」から「自学し、修得する」に変化する

実際に、コロナ危機の影響を大きく受けたのは、学校や教師ではなく生徒である。そして、2ヵ月、3ヵ月という休校期間は同じでも、既述の通りその間の成長度には個人差が大きかったと想像している。その主な要因はおそらく、「自律性の高低」と「家庭環境（保護者）の影響」ではないかと考えている。後者には本項の前段で述べた「社会人教育の不足（家庭・社会）」、親の生き方、振る舞いが影響していると思うが、生徒本人にはコントロール不能に近く、本稿ではこれ以上、掘り下げない。

学校教育として対処可能かつ対処すべきは、前者「自律性」の方である。この自律性に関しても、「親の影響が大きく、学校の指導だけでは限界がある」、と言いたい先生方も少なからずおられよう。しかし、中高ならば生徒は6年間、休日以外は朝から夕刻まで通学している。家庭のせいにするのは無責任だろう。

最注力すべきは、問1・問2でもふれた、学びのアプローチの転換だと考えている。今回の危機からのリカバリーを契機として、これまでの管理型、教え込み型、手取り足取りの過保護教育から決別できないだろうか。次項でこの視点をふまえた教育体制の再構築について考え、本稿を締めくくる。

■ “生徒の学び方と新しい学校像” の図



＜新しい学校像＞

・「教える教育」主体から「自学探究を支える教育」主体へ

※管理型、教え込み型、過保護教育から決別する

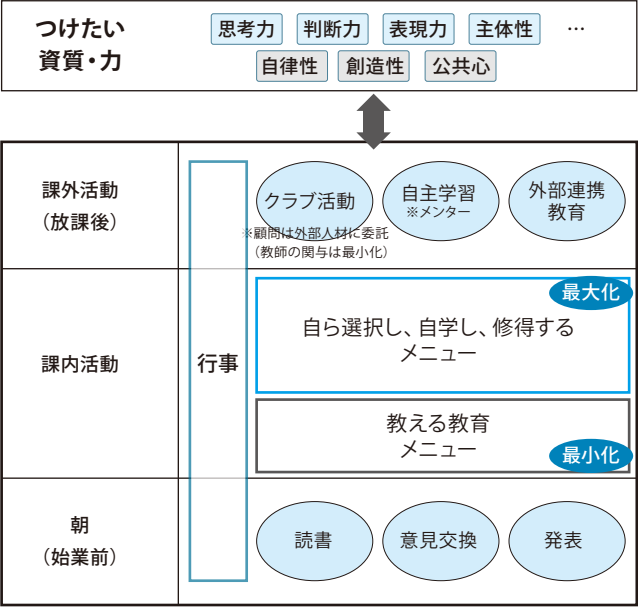
■ 教育体制の再構築

今回ご提案する教育体制のキーワードは、「時間」である。

誰の時間か。学校の主役は生徒であり、教育体制はすべて生徒の「時間」を中心に再設計したい。ただ同時に、生徒の時間の裏には教師の時間がある。生徒にとって最上の時間をつくるには、教師にも最上の時間が用意される必要があるだろう。

まず、下図をご覧ください。

■ “自学探究支援型の教育体系へ” の図



＜学びのアプローチ＞

「教えてもらう」人ではなく、「自ら選択し、自学し、修得する」人を育てる教育体系に変える

⇒高校卒業時に、生徒全員を社会に通用する“大人”にして送り出す

A. 朝の時間（始業前）

読書、意見交換、発表など、インプットとアウトプットを毎日継続して行う …習慣化 ※内容は試行錯誤

B. 課内活動

教師が「教える教育」メニューは必須の内容に絞って行う。

オンデマンド型で提供できるものは、最上のものに精選して提供する。最小の時間で最大の効果をめざす。

「自ら選択し、自学し、修得する」メニューは、好奇心をかきた





てる多彩な内容とし、教師以外にも職員、大学関係者、企業関係者、卒業生、保護者などを総動員する。

「行事」は数を絞り、そのかわり生涯忘れられない記憶となる体験をたっぷり詰め込む。社会人になってからその重要性を痛感する「タフさ（知力・体力・精神力）」を養う鍛錬型プログラム（名物行事）も保護者の協力を得て実施する。

### C. 課外活動（放課後）

「クラブ活動」は、今回のコロナ危機により最も大きな影響を受けた教育活動である。野球（甲子園）などスポーツの全国大会が中止になるなど、1年前に想像した方は皆無であっただろう。この衝撃的な出来事は、今後、生徒と教師双方の意識・行動に大きな変化をもたらす可能性がある。

生徒にとっては、意図せず自由時間が生まれ、クラブ活動以外の何かを見て、考える余裕が生まれたこと。再開後は喜んででもどおりの毎日へ、もいいが、卒業後は二度とかえってこない時間を、クラブだけでなく他の様々な体験をもつためにも使ってもらえればと思う。大学や企業が提供するイベントや活動に参加し、学外の交流から刺激を受け、視野を広げるのもいい。

また、定期的に自主学習の時間をもちたい。全員に自律的学習者になってほしいと期待するが、いつも一人で快調に走り続けられるとは限らない。教師、保護者等、誰かがメンターとなり、生徒自身の省察を促す、自身の興味や問題意識に気づかせる伴走者となれば、しっかりゴールまで完走できるのではない。

教師側の変化は、さらに大きいだろう。これまで、好むと好まざるとに関わらず、クラブ活動に多くの時間をかけてきた先生方に、急遽その時間がかえってきた。夕刻以降の時間や休日を家族と過ごすという、あたり前の日々を新鮮に感じた方々も少なかつたのではない。あるいは喪失感を感じた方、これまで断念してきた教育研究や教材開発といった本業に、遠慮なく力を注げる喜びを感じた方もおられたと思う。

クラブ活動が、自身の意志で参加した生徒たちの成長機会として貴重である点は、今後も何ら変わることはない。

一方で、教師においては授業、担任のような本業ではないこのクラブ顧問という業務をゼロから見直すきっかけが生まれた。危機後も変わらず時間と情熱を注ぎたいと願う先生方はいいとして、「この業務を教師が担う必要があるのか…」と感じる先生方に対して、顧問業務を教師の職務から切り離し、外部人材の活用に移行する転機になるだろう。この動きは公立校で先行してきたが、今後は働き方改革の視点からも、多くの私立学校で検討が進むと予想される。もちろん、単なる切り離しが目的ではなく、創出した時間は教育研究や教材開発等の本業に注ぎたい。また、デザイナー、プロデューサーあるいはメンターといった新たな役割を果たすための視野・知見の拡大、外部人材との交流や研修での切磋琢磨に時間を使っていたためである。

### ＜本項でお伝えしたかったこと＞

- ・「教えてもらう」人ではなく、「自ら選択し、自学し、修得する」人を育てる教育体系に変える
- ・課内活動では「教える教育」を最小化し、「自ら選択し、自学し、修得する教育」メニューを最大化する
- ・生徒にも教師にも余裕を持っていただきたい  
生徒の放課後は、クラブ活動だけでなく、多彩な経験を積む自学成長の機会へ
- クラブ顧問業務を教師の業務から切り離し、本業集中、外部との交流、自己研鑽など豊かな時間へ

### ■「コロナ危機後に選ばれる学校の条件」

最後に、筆者が考えるこれから選ばれる学校の条件をお伝えし、本稿を締めくくる。

#### 【コロナ危機後に選ばれる学校の条件】10項目

- ・利他の心を育む人間教育、社会教育を最重視している
- ・教育方法は自学探究支援が中心である
- ・学校ならではの豊かな学び合いの機会が豊富にある
- ・授業は対面を基本としつつ、オンラインの利点も活かす
- ・履修主義ではなく修得主義に立ち、卒業時能力保証を行う
- ・教師は「教える人」ではなく、「自学探究を支える人」
- ・教師陣には多様性があり、全員が確かな力量と情熱をもつ
- ・教師は本業に集中でき、放課後は自分を磨く時間である
- ・保護者は教育パートナーであり、同時に教育対象者でもある
- ・管理職は全体を俯瞰し、緊急時の決断・対処を躊躇なく行う

### 終わりに

#### ～大人の「社会的知性」と「行動力」が問われる～

実は、社会・産業は少しずつ変化し始めている。最近の新聞の紙面を広げていただきたい。以下のような主旨の記事が少なからずあるだろう。

- ・「株主第一主義」からの転換。公共の利益に貢献する…
- ・投資の変化。環境や社会問題の解決を目指す「ESG投資」
- ・市場原理まかせだけでは公益への配慮が足りない…

この社会貢献意識の高まりは、コロナ危機前から見られた潮流だが、危機によってこの意識の高まりは加速していくだろう。

大人の「社会的知性」と「行動力」が問われる時代に入る。

最後までご覧いただき、ありがとうございました。